泉氏、野党共闘修正探る

立民代表選、保守票を集約

共産と合意「現在はない」

立憲民主党の代表選は中道から保守系の議員が支持する泉健太氏が勝利した。決選投票でリベラル系のグループを基盤とする逢坂誠二氏との一騎打ちを制した。来夏の参院選に向けて党内をまとめながら共産党との共闘路線の修正を探る。

（1面参照）

泉氏は1回目の投票で国会議員と公認候補予定者の計286ポイントのうち96ポイントを得た。他の3候補は50～70ポイント台だった。

党員・協力党員およそ10万人の票でも3割強を取り首位だった。地方議員票のみ143ポイントのうち48ポイントを取った逢坂氏と僅差の次点だった。

決選投票で泉氏が得た国会議員のポイントは1回目での小川淳也氏の分を上乗せした数字に近い。両氏は民放番組で共産党との共闘で失ったものがあるかと聞かれて「ある」と回答した共通点がある。中道から保守の票を集約したもようだ。

逢坂氏のポイントは同じリベラル系の西村智奈美氏が1回目で得たポイントを足した水準だった。保守系とリベラル系がそれぞれ泉氏と逢坂氏に分かれて投票した可能性が高い。決選投票のポイントは6割を泉氏、4割を逢坂氏がとった。

泉氏は代表選後の記者会見で他の3候補を執行役員に起用する考えを示した。執行役員の半分以上を女性にするとも強調した。

立民は旧社会党系から保守系まで幅広い立場の議員が集まる「寄り合い所帯」で、原発や安保など政策面の食い違いもある。挙党体制を打ち出したのは、まとまりを欠きやすい状況への警戒ともいえる。

参院選に向けて党内調整が必要なのは共産党を含む野党共闘のあり方だ。先の衆院選は候補者を一本化して小選挙区で議席を増やした一方、比例代表でそれ以上の議席を減らした。

泉氏は記者会見で共闘路線について「単に継続ということではなく、まず（衆院選の）総括をしなければならない。その中で今後のことは考えたい」と慎重な言い回しで修正をにじませた。

政権交代した場合に「限定的な閣外からの協力」を共産党から得ると9月に合意したことに関しては「衆院選に向けて交わしたものと理解している。現時点で何かが存在しているのではない」と指摘。現在は効力がないとの認識を表明した。

一方で参院選の1人区で与党に勝利するために野党間の候補者調整は引き続き取り組む考えだ。

国民民主党との協力については「それなりに近い政党で、兄弟のように思われている」と前向きな考えを述べた。支持団体である連合は国民民主党との再合流を求めている。

日本維新の会については「現時点では少し遠めにいる。特段何か触れるような話はない」と語るにとどめた。

30日夜のBSテレ東「日経ニュース プラス9」では他党との合流を急ぐよりも「自分たちの党の魅力をしっかり打ち出すのを優先したい」と発言した。

自公政権との対峙の仕方は変える意欲をみせる。代表選で「政策立案型政党を目指す」と訴えた。「批判ばかりの野党」というイメージの脱却を意識し、公開の場で官僚らを問いただす「野党合同ヒアリング」をいったんやめるとも提唱した。

各党は泉氏が党内をまとめて方向性を示せるかを見極める。国民民主党の玉木雄一郎代表は「共産党との関係がべったりであれば連携は難しい。（新執行部の）判断を見定めたい」と話す。

共産党の志位和夫委員長は立民との合意について「わが党は誠実に順守したいし、立民にもそういう立場で対応してもらいたい」と共闘継続を呼びかけた。自民党の茂木敏充幹事長は「共産党との関係を明確にしてほしい」と泉氏に求めた。

立憲民主党代表選の投票結果（敬称略。数字はポイント）

		泉 健太	逢坂 誠二	小川 淳也	西村 智奈美
1回目投票	国会議員ら	96	62	72	56
	党員、協力党員	47	38	34	24
	地方議員	46	48	27	22
	合 計	189	148	133	102

		泉 健太	逢坂 誠二
決選投票	国会議員ら	170	116
	都道府県連代議員	35	12
	合 計	205	128

記者会見する立憲民主党の泉新代表（11月30日、東京都港区）

掲載日 2021年12月1日 日本経済新聞 朝刊 4ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。